

私の専門は理論言語学、とりわけ英語の史的統語論（生成文法）である。英語の史的統語論とは、簡単にいえば現代英語だけではなく昔の英語を対象にした文法の研究である。このような研究をしていると分野外の人たちからは文法を研究するとはどういう意味か、今では誰も話していない昔の英語を研究して意味があるのかなど率直な質問をされるのがよくある。この度、研究についてコラムを執筆させていただくという貴重な機会をいただいたので、この場を借りてこれらの問いに答えながら、英語

自然科学としての言語研究

はどういう意味なのかという問いについて答えてみたい。ふつう文法というと、助動詞のあとには動詞の原形が置かれるとか、一般動詞の疑問文ではdoを用いるとか、目的格の関係代名詞は省略できるなどといった、英語であれば英文法、すなわち英語の規則を思い浮かべるだろう。しかし、理論言語学における文法とは個別の言語の規則ではなく、すべての言語に共通する規則、専門用語でいえば普遍文法を指す。理論言語学の大家であるノーム・チヨムスキー氏によって提唱された生成文法の理論的枠組みでは、ヒトは誰でも生まれながらにして脳内に言語器官を持ち、生後に周りで話されている言語を聞くことによって、普遍文法が

生得的な普遍文法と生後に獲得する個別言語の文法がある。個別言語の文法は言語資料を通して直接観察することができるのに対して、普遍文法は脳内に備わっている生得的な言語器官の初期状態を指すため直接観察することができない。普遍文法の姿を明らかにするために、さまざまな種類の個別言語を観察し、それらの特徴を一般化し、その文法を理論的に精緻化していくほかない。ただし、言語には、さまざまな語族や語派があり、その特徴や規則も多岐にわたる。日本語と英語のようにながら普遍文法を探究していく手法も有効であるが、より近接した言語を比較していくことも有効な手法である。それでは、英語とともにも近い言語は何か。それは、少し前の英語である。言語は少しずつ変化していくため、100年単位で観察していくとその変化の過程ははつきりと見えてくる。

昔の英語の文法を

研究する意義とは

の史的統語論研究の意義について述べてみようと思う。

まず、文法を研究すると



名城大学法学部
法学科准教授
久米 祐介

個別言語の文法へと変化して、その言語を習得することができると仮定されている。すなわち、文法の研究とは、言語器官の正体を明らかにし、普遍文法とはどのようなものか説明しようとする試みである。

次に、昔の英語を研究する意義とは何かという疑問について答えてみたい。すでに述べたように、文法にはすべての言語に共通する

特に、英語はその歴史的性質上もっとも大きな変化をとってきた言語のひとつである。千年以上前の英語は現代の英語とは全く別の姿をしている。したがって、昔の英語の文法を研究することは、現代の英語と最も近い言語と全く別の姿の言語を直線上で比較しながら、普遍文法の姿を明らかにすることのできる理論言語学上きわめて有効な手法である。

くめ・ゆうすけ 史的統語論（生成文法）。名古屋大学大学院文学研究科。1978年生まれ。

